
あの頃

サウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃

【Nコード】

N21250

【作者名】

サウス

【あらすじ】

気がつくともう44歳になってしまった。二年半前にくも膜下出血を発症し、杖について歩くからだになった。その体に慣れてきた去年の始め、放射線治療の後遺症で再び倒れた。そして車椅子生活になり、リハビリ病院に入院した。

いったいオレは何になりたかったんだろう。どこへ行きたかったんだろう。

15の夏 1 (前書き)

15の夏、どんな人間にでもなれた。少しは受験勉強でもするか？
でもその前に・・・

15の夏 1

ゴクリ。喉を鳴らしながら、僕は家から持ってきた水筒ごと凍らせておいた麦茶を飲み干した。

中学の三年間打ち込んできた軟式テニス人生はあっけなく市の大会の一回戦で、幕を閉じた。

もともと軟式テニスがすごく好きで入った部活なかったからそれほど悔しさはなかった。

しかし、少し時間が経つと「あの時、こうしていたら・・・」

と後悔の気持ちに怒涛の波のように襲ってきた。

このころから、後悔することが増えた気がする。

部活が無くなって、おもいきり時間に余裕ができた僕はとりあえず、受験勉強でもしようか、と一瞬考えたが、文字どおり一瞬だけだった。

「15の夏は一度しかない。」と自分の考えを正当化しようとした。

そう、中学三年間でできなかった彼女を作り、あわよくば、この夏に大人の階段を上ろうと考えていた。

僕の妄想は果てしなく続いた。

第一章2話（前書き）

夏休み、田舎での心躍るイベントと言えば、夏祭りだった。

第一章 2話

夏休み・・・田舎での心ときめくイベントといえば夏祭りだ。本当は町中のでかい公園で開かれる祭りに女の子と行きたかったけど、夜、その祭りに女づれで行ったら、まず間違いなくカツアゲされる時代だった。へたれな僕にはそんな勇氣はなかった。

でも、そんな事より、誘いをオーケーしてくれる女の子がいない事が問題だった。結局、地元の神社の境内で催された祭りには誰も一緒にには行ってくれなかった。従兄弟の家から近い神社なので、二才上の従兄弟と弟、妹という涙が出そうなくらい健全な集団で祭りに繰り出した。

その祭りで僕は衝撃的な場面に出くわす。

その当時僕は中学二年の時に同じクラスだった、バスケをやっているクーコとみなから呼ばれている女の子に片想いをしていた。その恋は成就しそうになかったが、僕はテニスの最後の大会前に、彼女の写真をラケットカバーに忍ばせて戦いたくて、彼女に写真をせがんだりした。やっと、もらった写真は彼女がおそらく小学低学年のころの日舞の発表会の写真だった。今考えればそんなふざけた写真をくれた時点で脈なしとわかりそうなものだが、その当時の僕は写真ももらえただけで有頂天だった。いじらしいヤツ。

第一章 三話（前書き）

地元の神社の夏祭りに繰り出した僕はそこで悲しい思いをする。

第一章 三話

祭りに繰り出すと、焼きそばの屋台や綿菓子屋台には同じクラスのほとんど学校には来ないツツパリくん達がたくさん屋台のテキヤのオニイサン達を手伝っていた。夏休みなのに働いて感心な少年達だった。

「一人で何してるの？」聞き慣れた、女の子の声が僕を呼び止めた。愛しのクーコの声だった。

嬉しくて振り返ると、そこには浴衣姿のクーコとその横にはサッカー部のキャプテンが腕を組んで一緒にいた。

「りんご飴でも買おうかなと思ってな。」僕は目の前が真っ暗になって、しゃがみこみそうになるのを必死でこらえながら愛想笑いを浮かべて答えた。なぜかサッカー部のキャプテンが僕を見てクスリと笑った。その笑いの意味を後に僕は知る。

「はいよーりんご飴ひとつ！」同じクラスのヤンキイが威勢よく僕に渡した。一年半の片思いがあっけなく終わった瞬間だった。

15の夏 四話(前書き)

淡い片想いはあっけなく散ってしまった。

15の夏 四話

淡い片想いははかなく、こっぴみじんに砕け散った。後日、クーコと仲の良い女の子と付き合っていた陸上部のヤツから聞いたのだが、あの時のサッカー部のキャプテンの含み笑いには意味があった。

クーコは僕が彼女に書いた手紙を全て彼に見せて笑っていたのだ。

そんな事とはまったく知らず、僕はその時はひどく落ち込んだ。

苦い涙をたくさん流した。辛い15の夏の一夜だった。15の夏は結局、大人の階段昇るところか、階段を転がり落ちる始末だった。散々な夏だった。

気がつくと、秋の気配が漂いはじめ、僕もそろそろ受験勉強でも始めるかな、と思い始めた矢先、中学生生活最後のイベント、体育祭の季節が到来した。僕はここでまた一つの恋に出会う。

15の秋 一話(前書き)

何故、その女の子と仲良くなったかわからない。

15の秋 一話

何故、その女の子と仲良くなったのか、わからない。

すべて下心のせいだろう。今となっては、彼女の顔もはつきり覚えていないのだから。ただ名前ははつきり覚えている。純子と言う名前の女の子だった。

彼女とは同じ班で、少しハスツパというか、ツツパリ気味の女の子だった。

当時、イモ欽トリオのハイスクールらばい という歌が大ヒットしていて、僕達も体育祭の練習の時によく口ずさんでいた。

彼女と僕とは家が近くだった。当時の僕の家は海から近く、良く彼女とは堤防で会った。海を見ながら、とりとめのない話を良く話した。

付き合い始めて、二週間ぐらい経った頃、言葉が途切れて、沈黙が二人をおそうと僕は彼女の肩を抱き寄せ、唇を重ねた。僕のファースト・キスだった。

夕闇迫る海辺でのファースト・キスとは我ながらロマンチックなシチュエーションだった。

15の秋 二話（前書き）

ファーストキスを体験した僕は、一気に大人の階段を昇りたくなっ
た。

15の秋 一話

キスを経験した僕は毎日とても気分が高揚していた。当時の秘め言葉でABCと言われていたAを体験した僕は大人になる時が近づいてきたと勝手な妄想を膨らませていた。

事実、キスから少し後、海岸でブラウスの上からだが、彼女の胸を触ることが出来た。次はいよいよと思った矢先にあんなことが起こるなんて・・・

そろそろかな、と思っていた矢先に思いがけないことが起こった。

ある日、同じクラスのそれほど仲良くはない陸上部のヤツがやってきて、いきなり喋り出した。

「おまえ、昔、みな子と付き合ってたんだってな。それから面白いわけかたしたんだって。」

僕はこの話に触れられることがその当時はすごく嫌だった。

この話を詳しく知っているのは純子しかいなかった。

僕は純子の席に怒りの形相で向かっていった。

15の秋 三話(前書き)

「どうしたの、そんなに怖い顔をして。」純子が不安そうな顔で聞いてきた。

15の秋 三話

「どうしたの？すごく怖い顔して？」純子は不思議そうな顔をして聞いてきた。「純子、おまえ、俺とみな子のこと誰かに話したか？」僕は怒りを抑えきれない声で聞いた。

「ううん、誰にも話してないよ。」純子が不安げに答えた。

「そうか、俺はあいつから聞いた。じゃあ、あいつが誰から聞いたか、確認してくるよ。」僕はそう言い放って、この話を僕に話した陸上部のヤツのところへ向かった。陸上部のヤツにみな子とのことを誰から聞いたのか、問いつめた。

「あいつからだよ。」それは純子といつもつるんでいるハーマと呼ばれている女の子の名前だった。

「おまえ、今、純子と付き合ってるんだって。ハーマが純子から直接聞いたって言ってたぜ。」ヤツは楽しそうに言った。

僕は急激に純子に対する気持ちが冷めていくのがわかった。純子の席へ向かった。

「おまえ、みな子とのこと、ハーマに話したな。ふざけんなよ。二度と俺に近付くんじゃねえ。」
またしても、大人になり損ねた僕だった。

15の秋 四話(前書き)

純子と別れた僕は、少し投げやりになった。

15の秋 四話

純子と別れた僕は少し投げやりになり、同じクラスの腐ったミカンなヤツらと少しつるんだ。運悪く、当時はこの時期に内申書の最終点を決めることが多く、僕はこの時期の行いがたたって、希望高校への道は閉ざされることになる。そんなことになるとは夢にも思わず、彼らとの付き合いを続けた。

当時、流行っていたモノはなめネコと横浜銀蠅というツツパリロツクンロールのバンドだった。

僕はなめネコにはあまり興味がなかったが、横浜銀蠅にはハマった。ハマったというよりのめりこんだ。まさに若気の至りである。青春の苦い思い出というには重い過去である。

15の秋から冬(前書き)

若者を墮落させるにはもってこいの音楽と仲間が僕の成績を急降下させた。

15の秋から冬

多感な青少年を墮落させるにはもってこいの音楽と仲間が順調に僕の成績を下げていった。

僕は授業もサボりがちになった。しかし、心の中は焦る気持ちが日毎に強まっていった。この辺りが、へたれのへたれたる所以である。そして、母を交えた三者面談の日が来た。僕は素行の悪さが祟って、希望高校どころか、それより2ランクも低い高校がギリギリと言われた。

ハッと我に返った瞬間だった。

遅ればせながら、僕もようやく受験勉強を始めた。しかし、三ヶ月程の自墮落な生活は僕の学力を著しく低下させた。

僕はまたも、投げやりになりかかったが、今度は奮起して踏みとどまった。高校に行つてからの薔薇色の生活を夢見て、必死に勉強した。腐ったミカン達の甘い誘惑も断つて、青筋立てて勉強した。やがて年が明けて、受験の季節がやってきた。

15の春 最終話(前書き)

年があけて、受験まであと三ヶ月となった。

15の春 最終話

年があけて、受験まで、あと三ヶ月となった。僕は必死になって勉強した。いろいろと軌道を外れることが多かったので、修正は容易ではなかった。僕は、ラジオやカセットテープに吹き込んだ音楽を聴きながら、勉強する、所謂「ながら勉強」が好きだった。僕は好きな音楽を聴きながら、受験勉強に集中した。僕の生まれた年は「丙午^{ひのえうま}」という、この年に生まれた女の子は男を食い殺すというような迷信があった年で、所謂、競争率が低い世代だった。僕は、まず高校受験は受かるだろうとあまり根拠のない自信があったが、日に日に漠然とした不安が募って行った。そんな時、ラジオから懐かしい歌、キャンデイズの春一番という歌が流れてきた。僕はなぜか心がすつと軽くなった。いろんな事があった中学三年だったけど、次の高校時代が楽しみになってきた。明るい高校時代を夢見て。

15の春 最終話（後書き）

これは私の中学三年の時の話です。思い返すと、懐かしくも悔しい日々でしたね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125o/>

あの頃

2010年10月20日11時43分発行